

●活動を通じた地域との連携 ～学生と地域をつなぐ～

ボランティア・NPO活動センターでは、地域のさまざまな団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にも繋がる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生たちへ向けては、地域と繋がる活動のきっかけとなるような様々な体験企画を学生スタッフが中心となって提供しています。また、学生スタッフ自身も地域の団体や行政からのさまざまな協力依頼に対し、ボランティア活動の裾野を広げるために積極的に関わっています。

企画名	タイトル	「ナカマチ土曜夜市 in 丸屋町」事業へのボランティア協力
報告者名		歌藤 智弥（国際文化学部 国際文化学科 2年次生）
日時		2010年7月24日（土）15時00分～21時00分
場所		丸屋町商店街
イベント主催		丸屋町商店街振興組合
実施主体		ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
参加人数		39人（うち、学生スタッフ16人）

■経緯・目的

大津市にある丸屋町商店街では、毎年7月に夜市という縁日などのイベントが開催されています。ボランティア・NPO活動センターでは、丸屋町商店街振興組合からの依頼を受け、夜市の協力を行っています。

縁日のボランティアということもあり、学生にとって参加しやすくボランティアをはじめの良いきっかけとするとともに、大津市の地域の人々や商店街の問題に触れ、夜市を通じて地域のことを考えてもらう機会とし、地域のまちづくりに貢献することにつなげることを目的としています。

■概要

①まち歩き

夜市のボランティア活動に参加する学生に商店街など地域のことを知ってもらうため、夜市開始時間前に商店街の方に商店街内を案内

内していただきました。

②商店街の出店運営

カキ氷、綿菓子、金魚すくい、プラ板作り、さいころゲーム、輪投げ

③学生オリジナル出店の運営

ゼリーinジュース、フランクフルト

④ステージでのイベント調整

学内のよさこいサークル「華舞龍」の出演調整を行いました。

⑤パネル展・クイズ大会の運営

丸屋町商店街振興組合の加入店に訪問、インタビューさせてもらい、その内容をパネルに張り出して展示をしました。夜市当日はお客様へ商店街に興味を持って貰うために、パネルを使ったクイズを行いました。また、商店街の歴史を知ってもらおうということで、古きよき町並みを写した写真の展示も一緒に行いました。



■参加者の声・得られた効果など

- ・初めてのボランティア活動だという学生が多く、「ボランティアって、こんなに気軽にできるんや!」といった声もあり、ボランティアに好意的な印象を持ってもらえました。
- ・活動前にアイスブレイクを行ったことで、参加者同士や学生スタッフとも仲良くなり、楽しく活動できた。
- ・普段できない地域の方との交流ができてよかった。
- ・商店街の方からは、「店舗が次々と減り、高齢者が多くなりましたが、学生さんたちの力で夜市が開けます」という声をいただくなど、喜んでもらえました。

■学んだこと・今後の課題

- ・まち歩きは初めての試みで、参加した学生に趣旨が伝わっていなかったところもあったので、内容をもっと練る必要があったと思います。
- ・インタビューでは各店舗の方から、貴重なお話を聞かせて頂き、とても勉強になり、パネル展のクイズ大会も盛況でした。
- ・出店が忙しく、休憩できなかった学生もいたので、フリーの人間を配置、または全体の人数を増やしたほうが良いと思いました。
- ・当日までのスケジュールの立て方や、企画メンバーの学生スタッフ間の情報共有不足などを改善したいと思います。

■夜市当日以外の取り組み

- ・環びわ湖大学地域交流フェスタ2010での発表

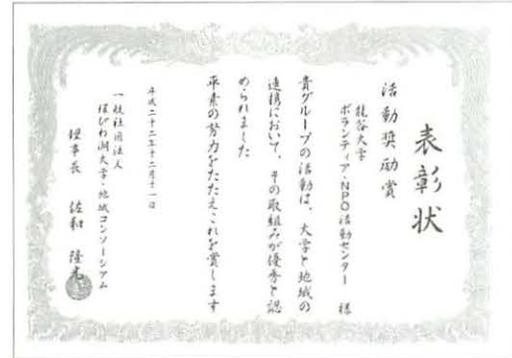


平成22年12月11日(土)に滋賀県立大学交流センターで行われた「環びわ湖大学地域交流フェスタ2010」で発表を行いました。

フェスタでは、ポスター展示発表を行うとともに、研究交流会(セッション発表)での

「地域をフィールドとする学生活動」の事例の一つとして発表を行いました。

ポスター展示発表とセッション発表での報告内容を踏まえて選ばれる「活動奨励賞」を受賞し、表彰状をいただきました。

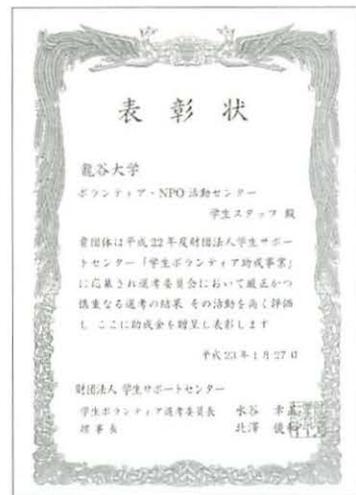


- ・平成22年度「学生ボランティア団体支援」の助成団体に採択

この活動を充実させることを目指し、(財)学生サポートセンターの平成22年度「学生ボランティア団体支援」へ応募し、助成団体に採択されました。

表彰式が1月27日(木)にナジックセミナーホール(京都)で行われ、「採択団体の中でも素晴らしい取り組みの一つである」との評価もいただきました。

この助成金を活かし、さらなる活動の充実につなげていきたいと思っています。



企画名	タイトル	大津祭へのボランティア協力
報告者名		深水 雅士 (社会学部 地域福祉学科 2年次生)
日時		2010年10月3日(日) 10時00分～15時00分/勉強会&山建て見学 10月9日(土) 17時00分～21時30分/宵宮 10月10日(日) 8時00分～18時30分/本祭
場所		大津市中心市街地など
イベント主催		NPO法人大津祭曳山連盟
実施主体		ボランティア・NPO活動センター (瀬田)
参加人数		30人 (うち学生スタッフ15人)

■経緯・目的

滋賀県大津市中心市街地を中心として、毎年行われる伝統行事『大津祭』で、「学生がボランティアに参加することで大津の文化・伝統・現状をまちの人と学び、学生自身が地域の一員として何ができるかを考えてもらう」ことを目的としました。

■概要

①勉強会&山建て見学

まちづくり大津百町館にて勉強会を開き、大津祭の歴史を学びました。その後、実際に山建てを見学して試し曳きにも参加させてもらい、その中でまちの人々と交流しました。

②スタンプテーリングボランティア (宵宮)

スタンプ台紙の販売や景品の交換

③曳山綱引きボランティア (本祭)

白玉町の西宮蛭子山の曳山の綱引き

④警備ボランティア (本祭)

曳山の巡行時の観光客の警備

⑤町家の幕張り・幕降ろし ※諸事情で中止



■参加者の声・得られた効果など

10月3日の勉強会&山建て見学は初の試みでしたが、一般学生からは「歴史や文化事前に知れてよかった」や「勉強会に参加できればよかつ

た」という声があったので初めてにしてはうまくいったのではないのでしょうか。また、去年の反省を踏まえて、当日までに参加する学生との交流の場を設けたことで参加者同士や学生スタッフとも仲良くなって楽しく活動することができました。

概要番号	参加のべ人数※ ()は学生スタッフ
①	21名 (10名)
②	5名 (5名)
③	14名 (5名)
④	12名 (6名)
⑤	3名



【参加した学生の声】

- ・地域の方がいつも静かな商店街が今日は盛り上がっていると言ってくれてうれしかった。
- ・丸一日、まちのために活動ができてよかった。
- ・お祭りの雰囲気が間近で味わえて楽しかったし、伝統文化に携われた。

【地域の方の声】

- ・学生がいないと成り立たないし、参加してくれる学生のパワーにはいつも感謝しています。
- ・これからもどんどん後輩を引き連れて頑張ってほしい。



■学んだこと、今後の課題

半年間、企画メンバーの学生スタッフと大津祭ボランティア携わってきた中で二つのことを学びました。それは「感謝」「絆」です。その二つを学生スタッフ、参加学生、地域の方々と感じ合えたのではないかと思います。

今回、最終的には募集人数が定員に達しましたが、毎年締め切り間際なので広報の時期を早める必要があります。また、10月3日の勉強会は今回が初めてで、山建て見学や試し曳きの時間が合わず、予定どおりにいかなかったため、曳山責任者の方ともしっかりと密に連絡を取る必要が

あったと思います。

今後は、プログラム内容に関してももっと内容の濃いものを作りあげていく必要があると感じました。

■その他の取り組み

・環びわ湖大学地域交流フェスタ2010での発表
12月11日(土)に行われたフェスタのポスター展示発表で大津祭のボランティア活動の取り組みを紹介しました。

ポスターを見た人に、今年度の取り組みや参加して感じたことなどを紹介したり、質問に答えたりしました。



企画名	タイトル	FUKUSHI 体験!秋のボランティア祭
報告者名		佐々木 綾 (社会学部 臨床福祉学科 2年次生)
日時・場所		① 2010年11月7日(日) 10時00分～17時00分 「こだままつり」滋賀大学教育学部附属特別支援学校グラウンド ② 2010年11月13日(土) 14時00分～16時00分 特別養護老人ホーム福寿荘 ③ 2010年11月21日(日) 10時00分～17時00分 「山科醍醐こどもの創作劇」京都市東部文化会館ホール
実施主体		ボランティア・NPO活動センター(瀬田)
受入団体		① 唐崎やよい作業所 ② 社会福祉法人 華頂会 特別養護老人ホーム 福寿荘 ③ NPO法人 山科醍醐こどものひろば
参加人数		① 19人(うち、学生スタッフ15人) ② 6人(うち、学生スタッフ5人) ③ 19人(うち、学生スタッフ14人)

■経緯・目的

福祉系のボランティアに参加してもらうことで、より多くの人とふれあい、ボランティアをはじめのきっかけになってもらうことを目的

に、障がい児者・高齢者・児童の3つの分野に分かれて瀬田キャンパスの学生と一緒にボランティアに参加しました。

ボランティアはしたいけれどきっかけがな

かったり、初めて行くのに1人は不安と感じている学生も多く、今回は学生スタッフと一緒にボランティアに参加することで、ボランティアの楽しさを知り、今後もこういった活動を継続してもらいたいと考え、この企画を実施しました。



■概要

以下の①～③のボランティア活動に協力し、それぞれ活動前の学内説明会や活動後のふりかえりなども行いました。

①障がい者施設などで運営する秋祭りのボランティア

来場者、運営ボランティア合わせて約4,000人という大規模なイベント「こだままつり」に来る障がい児者と遊んだり、模擬店やバザーなどの手伝いをしました。

②お年寄りとのふれあい

老人ホームの高齢者の方々とお話をしたり、レクリエーションなどを体験しました。

③子ども向けイベントでの遊びコーナーの手伝い

設立30周年を迎えるNPO法人山科醍醐こどものひろばの記念イベントにちなんだ遊びのブースの運営や、こどもによる創作劇の会場整理などをしました。

■参加者の声・得られた効果など

- 大変な作業が多かったけれど、学生スタッフみんなが協力して頑張っているところを見て、自分もよい気持ちになりました。
- いろんな人と関わって、学校では体験できないことを体験できたのでよかったです。

- 学生スタッフの方がとても親切にきちんと段取りをしてくれていて、すごくやりやすかったです。
- たくさん子どもたちやスタッフ、学生のみなさんと関わって、楽しみながらすることが出来ました。参加してよかったです。
- ただ子どもたちと遊ぶだけでなく、自分たちが子どもに遊びを教えるという責任感も経験できて、すごくよかったですし、とても楽しかったです。

■学んだこと・今後の課題

今回の企画では、福祉のボランティアが初めての学生でも参加しやすいよう、日常の活動だけでなくお祭りなどのイベントボランティアも紹介しました。

広報期間が短かった活動もあり、参加学生は目標人数に達しませんでした。当日はたくさんの学生スタッフが協力してくれて、参加学生からも「参加できてよかった」「またボランティアしたい」という声を聞きました。企画全体では、広報手段として自分たちの体験談などを伝えたり、チラシの見た目や印象などをもっとわかりやすくする、といった反省点が出ました。

また、高齢者に比べて子どもと関わるボランティアを希望する学生が多いことから、ボランティア初心者の傾向なども分かりました。

今後の課題として、まずは企画メンバー間での情報共有をしっかりとる必要があるということと、より多くの学生が参加しやすいように、広報の方法を見直し、センターと団体がつながるきっかけとして継続させていきたいです。



企画名 タイトル	「くさつ子どもフェスタ2011」へのボランティア協力
報告者名	松野 嵩（国際文化学部 国際文化学科 1年次生）
日 時	2011年1月16日（火） 8時00分～16時00分
場 所	草津市野村運動公園
イベント主催	「くさつ子どもフェスタ2011」実行委員会
実施主体	ボランティア・NPO活動センター（瀬田）
来場者数	22人（うち、学生スタッフ16人）

■経緯・目的

毎年実施されている「くさつ子どもフェスタ」に本学学生に参加してもらうことで、ボランティアの楽しさを知ってもらい、普段関わることの少ない子どもやその保護者の方たちとふれあう機会をもってもらいたいと思い、実施しました。

また、学生に子どもとの遊びを通してボランティアの楽しさを知ってもらい、ボランティアに対する抵抗をなくして、今後のボランティア活動のきっかけにしてもらうことも目標としています。

■概 要

- ・ボランティア参加者との交流(アイスブレイク)
- ・風船アーチ作り
- ・ぶんぶんゴマ
- ・シャボン玉遊び
- ・他の団体の手伝い（どんぐりキーホルダー作成）
- ・着ぐるみ（たび丸くん）を着てのPR活動
- ・ステージ出演の調整

学内のよさこいサークル華舞龍の出演調整を行いました。

■参加者の声・得られた効果など

- ・子どもと遊ぶことができ楽しかったです。
- ・雪が降って寒かったけど、楽しかったです。
- ・丁寧に教えてもらったのでわかりやすかったです。
- ・たくさんの人と話せてよかった。また参加したいと思いました。
- ・アイスブレイクも良い感じで終わり、片付けも難なくスムーズにできていたと思います。

■学んだこと・今後の課題

雪による場所や時間の変更があり、バタバタしてしまい余裕がありませんでした。前もって悪天候のパターンを考えておくべきだったと思います。そして、学生スタッフ内での情報共有が十分にできていなかったのも、参加学生に質問されても答えられないことが多々ありました。また、当日の流れやシフトなどを当日に連絡したのでもううまく対応ができませんでした。事前に情報共有をしっかりと行うことと、急な事態にも対応できる柔軟性が必要だと思いました。

昨年度の課題だった参加者同士の交流は、アイスブレイクなどをして深く交流できたので改善できたと思います。また、参加している他の団体のお手伝いを通して交流できたので良かったと思います。

目標人数に達成できなかったのも、広報の方法を見直す必要があると思います。次年度の企画のために今年の反省点について深く考えて、次の企画に繋げていきたいと思いました。



企画名	タイトル	アフターショック ～災害ボランティア・私たちにできること～ in伏見区深草支所
報告者名		竹本 真梨（法学部 政治学科 3年次生）
日 時		2011年1月15日（金）～2月4日（金）
場 所		深草総合庁舎 1階コミュニティルーム
実施主体		ボランティア・NPO活動センター
共 催		京都市伏見消防署
参加人数		222人（地域住民の方）

■経緯・目的

災害は地域と学生にとって共通の問題です。また、龍谷大学が広域避難場所でもあります。そこで、当センターが今年10年を迎えるにあたり、センター設立のきっかけとなった兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）や伏見区の災害、災害ボランティアについて展示することになりました。

今回は昨年11月に行った本学学園祭の展示品の他に伏見消防署の方にも協力を得て、防災グッズやパネルなども合わせて展示を行いました。

この展示は、地域の方にボランティア・NPO活動センターの取り組みを知ってもらうとともに、災害の悲惨さや災害ボランティアの役割、防災の大切さを知ってもらい、事前に普段から何が出来るのか、災害発生時・後にどの様な取り組みが出来るのかを考えるきっかけづくりを目的としています。



■概 要

昨年の本学学園祭の時に使用した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）や過去に発生した・今後発生する伏見区の災害、災害ボランティアの役割や活動、災害時の避難の仕方について展示を行いました。

また、その時の展示で開催した「災害ボランティア講座・寸劇」の様子もDVDで映像を流

しました。

伏見消防署の方にも協力を得ることが出来き、防災グッズ・マップ、パネル、住宅用火災報知器、消防署の取り組みについてのDVDなども合わせて紹介しました。

展示開始の3日間（1月15・17・18日）は学生が展示会場に常駐し、展示への呼び込みやビラ配り、展示物の説明を行いました。展示会場が深草総合庁舎の1階で、休憩できるようなスペースであったため、子どもから高齢者の方まで多くの方が来場されました。

■参加者の声・得られた効果など

参加者からは、「阪神・淡路大震災の時は京都でも大きく揺れ、家具が倒れたのでとても怖かったのを憶えている」、「災害が起こった当時は防災グッズで備えをしていたが、時とともに危機感が薄れていた。今回の展示を見て、やはり災害時の備えが重要だと改めて感じた」、「阪神・淡路大震災の時に初めてボランティアに行った」、「私たちは大きな災害を経験してきたが、もう年もとって災害や防災などの活動することが難しい。あなたたち若い人がこれからもこのような活動を続けていってほしい」などがありました。

この声からも分かるように、京都にも兵庫県南部地震の影響はありましたが、長年、大きな災害が起きていなかったために、地域住民の災害に対する意識や関心が薄れていることが分かりました。また、この展示を通して今年で16年になる兵庫県南部地震を思い出し、再度災害に対する意識が高まった方もいらっしゃいました。

災害の被害にあった方、被災地へボランティアに行った方の声を聞くことができ、兵庫県南部地震などの災害の被災状況を直接見たことがない私たち学生にとって、非常に貴重な経験となりました。

■学んだこと・今後の課題

昨年11月に実施した本学学園祭の展示では、学生の参加に比べると少なかった地域住民の方に、当センターの取り組みや災害・災害ボランティアについて見ていただくことができました。地域と本当に関わりたいのなら、自分達で自ら地域に赴き、活動していくことの大切さを実感しました。

また、今回の展示を通して、じっくりと地域の方と話をすることができ、地域の方が普段災害に対してどのように考えているのか・取り組んでおられるのかという事と同時に、伏見区の歴史や地域の問題などについても知ることができ、非常に学ぶことが多かったです。

地域の方の関心は、災害や防災にあり、災害ボランティアについてはあまり興味を示してもらえませんでした。また、私たちの模造紙は文字が多く、来場者の方も少し見えにくい様子であったことなど、今回の展示で改善するべき点も知ることができました。

今回は深草総合庁舎の施設をお借りし、伏見消防署の方にも共催で企画を行いました。初めての試みであり、設営時や展示期間中に両団体

には様々な負担をかけてしまいましたが、多大な協力により今までの当センターの企画だけではできなかったより多くの地域住民を巻き込んだ企画となりました。前回11月の学園祭と今回の災害ボランティア展示企画により、伏見区社会福祉協議会、深草総合庁舎、伏見消防署とのネットワークがさらに広がったと感じました。今回の展示経験を活かして、今後私たち学生スタッフのみでなくこれら3つの団体と連携し、本学学生をより地域で活動できるように巻き込み、地域と学生を繋げていきたいと考えています。



企画名	タイトル	伏見区野宿者支援プロジェクト
報告者名		竹田 純子 (深草キャンパス コーディネーター)
日時		2010年4月21・22・23日、5月24・25日、6月16・17日、 7月13・21日※14日実施予定であったが、暴風雨のため21日に振替実施 9月30日・10月1日、10月19・20日、11月10・11日、12月15・16日、 2月15・16日、3月24・25日 いずれも、15時30分～19時00分で実施 (多少の前後はあり) ●8月9日、1月27日 (この2日間は、学生の夏季休暇中及びテスト 期間中であったため、1日で実施。) 14時00分～19時00分 ●5月13日、12月9日 12時30分～13時00分 活動説明会を実施
活動場所		京都市伏見区の東高瀬川・西高瀬川・山科川周辺
参加人数		140名 (学生60名、教職員等4名、JIPPO関係者53名、センター職員23名)
実施主体		(特活) JIPPO、西本願寺、ボランティア・NPO活動センター

■経緯・目的

2008年度末にボランティア・NPO活動センターとも関係の深い(特活)JIPPOの専務理事であり、元龍大教授である中村尚司先生から、「東西高瀬川および山科川の橋の下などで生活している野宿者を支援する試みをJIPPOで行いたいの協力をして欲しい。」との依頼が寄せられ、実際に、JIPPOスタッフとセンタースタッフ、学生スタッフの有志で河川を歩き、調査してみたところ、支援が必要だと確信し、野宿者の生活支援を目的に'09年春よりJIPPOと協力して伏見区野宿者支援プロジェクトを本格的に開始し、今年度も引き続き活動しています。

また、この活動を通じて、参加学生に社会の問題や自分自身の偏見に気づき、自分自身の問題として考え、行動できるようになるきっかけになることも目的とし、広く学生に対し、参加を積極的に呼びかけています。



■概要

月に1回ずつ2日間で3河川(東高瀬川・西高瀬川・山科川)の周辺に居住している野宿者に食料などの支援物資を持って訪問し、世間話

をしながら健康状態や困っていることなどについて聞き取りを行い、必要に応じて情報提供や行政への働きかけを行いました。

また、毎回参加者の変更があるため、顔合わせと初参加の学生には簡単な活動に対する説明を行った後、支援物資の配布準備を行い、深草キャンパスを出発します。活動終了後は毎回、JIPPOのスタッフを交えたふりかえりと、参加学生とコーディネーターでふりかえりを行い、活動を通じて得た気づきや疑問などを共有しています。

訪問メンバーは、JIPPOスタッフ、本学学生、本学教職員、センタースタッフで実施しています。

昨年度は単発での参加が多かったのですが、今年度に入り、複数回参加する学生が増えたため、より密度の濃いコミュニケーションがとれるようになりました。学生への呼びかけは、主に募集説明会やHPを通して行っています。

★NPO法人JIPPOとの役割分担は以下の通り

JIPPO	ボランティア・NPO活動センター
<ul style="list-style-type: none"> ・訪問の際の車の手配及び運転 ・支援物資購入のための資金提供 ・入浴券の購入 ・行政機関との対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援物資の購入(会計報告も含む) ・支援物資の管理(入浴券他、支援物資全般の管理) ・支援物資の配布準備 ・広報活動(ボランティアの募集及び活動報告) ・勉強会の実施
報告書の作成やマスコミ対応などについては、両組織が共同で実施しています。	

■参加者の声・得られた効果など

- もっと多くの人に関心を持って欲しい。(知らないとその人たちのことを考えられないから)
- 「死にたい」と繰り返している野宿者の方が「仕事を死ぬまでずっとしたい」と何度も言っていたことがとても強く頭に残っています。『命の重み』について考えさせられました。
- 自分の偏見に気がついた。
- 働くところがあっても、虐めがあることもあり、働きにくいという現状がショックだった。
- 『ここから退去せよ』という意味合いの張り紙を初めて見ましたが、対案なく排除される野宿者の実態を目にしました。 等

■コーディネーター所感

この活動を始めて、2年目になりました。この間、景気は悪化し、野宿者の皆さんから寄せられる声は、深刻化していくばかりのように感じています。

この活動を通じて、飲まず食わずの現状を耐え切れず、窃盗という罪を犯してしまったAさん、仕事のない現状に絶望し、自殺未遂を繰り返していたBさん。テントを燃やされ、仲間のテントに仮住まいしながら、『体がだるいけど、歳のせいやから大丈夫。また来月』と言って別れ、その直後に急性白血病を発症し、翌月には亡き人になってしまっていたCさん。『良いお年を！』と別れ、翌月に仕事の帰りに不慮の事故でなくなったDさん等など、さまざまな苦悩

を抱えながらも懸命に生きている人達に出会いました。

簡単に『自己責任』といった言葉では片付けられない厳しくて辛い現実が私達のすぐ近くにあります。この現実にも否応なく向き合わされるこの活動は、精神的にとっても辛く感じることもあります。それなのになぜ、たくさんの学生が何度もこの活動に参加するのでしょうか。それはきっと、苦しい現実の中にもたくましく、様々な工夫をしながら生活している人たちの姿から学び、『もっと若いもんが社会に目を向けないと、自分にかかってくるで』などと、会話をしている中で考えさせられることが多いからではないかと思っています。

この活動が必要なくなる日はまだまだ先のことだと思います。その日まで学生と一緒に学びながら、悩みながら、努力を重ねたいと思います。

